

回教及び其の教祖

大川 周 明

回教諸國の衰運と伴ひて、今や回教其者もまた悲しむ可き打撃と抑壓とを受けて居る。さり乍ら若し之を以て回教の生命の源までが既に涸れ初めたやうに思ふ人があるならば、其人は甚だしき速断を敢てするものである。成程一時は歐羅巴の天地を震撼せしめた回教徒の全盛時代は、過ぎ去りし昔の夢となつた。併し乍ら回教其者は決して過去の宗教として取扱はる可きものでない。そは今日に於ても尙ほ儼然たる一個の大宗教であり、且又吾等をして其の多望なる將來を想はしむる生命と力とを具へて居る。回教紀元第八年に、教祖ムハムマッドが『人類を舉りて悉く吾教に歸依す可し』との宣言を世界に向つて發して此かた、アラビヤの砂漠を搖籃とせる此の宗教は、宛ら燎原の火の如く四方に弘まり、固より時によつて盛衰隆替を免れなかつたけれど、現に之を數字の上から言つても、二億三千萬を超ゆる多數の信者を有して居る。世界の各地に散在する總ての回教徒の町々のシムボルなる典雅な招樓の上からは、日に五度祈禱の時刻の來れるを告げる樓守の聲が、今も尙ほ古への如く高らかに響き渡つて居る。而し

「道」第85号 (1915.5)

て總ての信者は其聲と共に、暫く在らゆる現世の仕事と離れ、身體を淨めて會堂に集まり、聖地メッカに向つて跪拜しつゝ、教祖が教へたる祈禱を長老の音頭に連れて一齊に獻げるのである。其の奉ずる信條に忠誠なることに於て、其の信仰の篤實なることに於て、ムハムマッドの信徒等は、之を大體の上から言へば、他の如何なる宗教を奉ずる者に比べて、優るとも決して劣つては居らぬ。

加之、年々新たに回教に歸依する者の數は、驚く可き多額の費用と勞力とを布教の爲めに注いで居る基督教に改宗する者よりも却つて多い。殊にアフリカと土人に對する回教徒の熱心なる布教は、基督教の傳道師をして殆ど後へに墮若たらしめ、其の恐慌と敵意とを買つたほど目覺ましき成功を收めて居る。一昨年ツウリツヒに開催せられし萬國日曜學校大會に於ては、回教對抗策を講ずる爲に、先づ回教國の宗教的並に社會的事情を精査するの必要ありとし、夫々の専門學者をして各方面の研究に従はしめる事を議決した。而して其等の學者の報告は、明一九一六年吾が東京に於て開催せらる可き大會に於て公表せられる事になつて居る。また昨年英國教界の一問題となりしキクエー事件の如きも、東部アフリカに於ける新教各派の傳道師が、小異を捨て、大同を以て合し、共通の信條儀式を定めて布教方針の一致を圖つたのが、偶々本國教界の論題となつたのである。蓋し單純なるアフリカの黒人に取りては、回教の簡明なる信仰が極めて入り易きに反し、基督教の新教各派が、互に異なる旗幟を樹て、分立して居るために、黒人をして種々なる疑惑を抱かしめ、遂に傳道の實を擧げかねるのみに非ず、却つて相率ゐて回

教に走らしむるに至つた事が、取りも直さずキクエー事件の原因であつた。

二

加ふるに全世界の覺醒せる回教徒の精神に萌し初めたる汎回教主義は、年々に其勢を加へ來りて、今や深慮ある歐洲政治家の一大問題となつて來た。殊に印度及び埃及の回教徒間に、革命的國民的傾向の著しく盛んになつて來た事は、世界に於ける英國の地位に對して、由々しき威嚇となりつゝある。近東及びアフリカ北部を旅行した人の紀行を讀む時は、回教大學に學びつゝある青年が、事あれば即ち相會して激越なる演説に悲憤慷慨の情を洩らして居る事實を記して居る。そは竟に爲すなき亡國の民の空しき叫號として聽き流す可きものであらうか。天國は劍の蔭に在りてふ教祖の言葉を文字通りに信奉し、宗教的戰爭の爲には、決して流血を辭せざる回教徒の結束によりて、或は恐る今後世界史の一大變局が新たに展開せられる様な事が無いであらうか。

古への回教徒が彌勒菩薩の出世を渴仰せる如く、また猶太の民がメシヤの降臨を熱望せるが如く、回教徒もまた第二のムハムマドなるマーデイの出現を翹望して居る。佛敎又は猶太敎に於ては、その信仰の性質上、假令今後彌勒又はメシヤが世に現はれるとしても、その世界史に及ぼす影響は、内面的のものである代りに、極めて徐々として加はり來る可きものである。併し乍ら回教に於ては著しく兩者と事

情を異にし、若し回教徒の間に一個の英雄が出現して、此人こそ彼等が多年待ち焦れしマーデイなれと信せられた曉には、全回教徒は擧つて劍戟を提げて起ち、起つて異教徒に向つて神聖なる戰爭を挑むのである。恐らくマーデイの出現は、永遠に實現せられざる單なる希望として終るであらう。たゞ吾等は少くとも回教に於ては、政治と宗教とが夫程まで密接に結合して居ること、従つて其の信者の民族的覺醒並に其の勢力の増長は、最も直接なる影響を世界史上に及ぼすことだけは知つて置かねばならぬ。

三

不幸にして從來回教徒は基督教國の攘夷的精神によりて其面を黒くされて來た。基督教の排他的信仰が、往々にして他教に對する公平なる判斷を不可能ならしめる事は、獨り回教の場合に於てのみ然るのではない。佛敎も儒敎も將又神道も、決して歐米人によりて十分正しく理解されて居らぬ。さり乍ら就中回教は、基督教が面々相對し來れる恐怖す可き宗教的並に政治的爭覇者なりし理由の下に、取り分け甚だしき誤解と殘酷なる非難とを受けて居る。例へばムハムマドは餘りに嚴格に偶像崇拜を禁じた爲に、その信徒は殆ど狂暴を以て呼ばるべき程の偶像破壊を敢てして居るにも拘はらず、回教徒は長い間偶像教徒と呼ばれて居た。第十四並に第十五世紀に盛んに流行したムハムマド——當時はモーメツト・バフオメツト・モード・マフー等の轉訛音を以て知られて居た——を主人公として數々の物語に於て、回教々祖は凡

を人間の想像し得る一切の罪惡を一身に歸せられて居る。ルナンの記す所に據れば、『ムハムマッドは肉慾の奴隸なり、駱駝盜賊なり、僧長の職に在りて私の野心を遂げ得ざりし爲に、其の怨恨を同胞の上に晴らさんとて、新しき宗教を發明せる者なり』と書いた史家さへもあつた。ダンテは彼を争論の種を蒔く者として『地獄』の第八獄の第九囊の中に投じた。シェークスピアは彼を呼ぶに『暗黒の王』を以てし、また盜掠及び殺人を司る惡魔とした。ルーテルが苛酷なる非難を彼に加へたのは不思議もないけれど、夫の溫醇なるメラントンまでが、彼を以て惡魔ゴック又はマゴックの化身であると信じて居た。而して其の最も奇抜なるは、羅馬教會の名なる一論客が、ムハムマッドが希伯來語又は希臘語又は拉丁語を以て、哈蘭を書かずに、亞刺比亞語を以て書いた事を非難して、『蓋し彼は一個の動物にして、動物たるに適ししき言語を知れるに過ぎざりしなり』とさへ言つて居る。宗教の比較研究が盛んになるに従つて、眞面目なる少數の學者には、回教の眞相が知られて來た。されど一般民衆殊に基督教の教職に在る歐米人の間には、回教に對する誤解と敵意とは依然として尙ほ熾んである。印度に於て發行せらるゝ一回教雜誌には、昨年の夏に『新しき十字軍企てらる』と言ふ題を掲げて、基督教の回教に對する迫害を述べて居た。十字軍とまで呼び立てるのは、聊か誇張に過ぎるやうに思はれるけれど、少くとも基督教各派の教師たちが、回教を以て彼等の共通の敵となし、結束して之に當らん事を欲して居ることだけは、拒み難き事實である。

四

さり乍ら基督教徒が如何に口を極めて非難すればとて、吾等は回教を以て彼等が言ふ如き『惡魔の宗教』であるとは信せぬ。長瀬鳳輔先生は曾て土耳其及び小亞細亞を旅行して、ムハムマッドの信者等が、如何に正直であり律義であり、特に金錢に關して廉潔であり、是又如何に義侠心に富めるかを目睹して來た事を本誌の上に發表されて居る。アレポに於て土耳其の一高官を夫とせる英國婦人は、親しく長瀬先生に向つて、『眞に理想的良人と稱すべきものは土耳其人に於て始めて之を求めることが出来る、妾にして若し本國に在りせば、恐らくは斯かる多幸なる家庭を營むことが出来なかつたらう』と告げたとの事である。而して此の尊敬すべき性格は、一には民族傳來の特性でもあらうが、主として回教の信仰によりて養はれしものなる事を忘れてはならぬ。また予自身も昨年滿洲に旅行し、奉天に於ける回教徒の實際を目撃して、深き敬意を彼等に向つて拂はざるを得なかつた。奉天には約二萬の回教徒が居つて、三個の會堂——支那の回教徒は自ら清真教と稱し、其の會堂を清真寺と呼んで居る——を有し、教育に關して殆ど風馬牛なる支那人の間に在りて、獨力經營を以て三個の小學校及び一個の女學校を設立し、範を吾國の小學校に採りて回教少年並に少女の爲に熱心なる教育を施こして居た。予は一清真寺の監督、其下に在りて回教神學の研究に従ひつゝ、ある數名の青年、及び小學校を主管する一教師と親

しく應接して、彼等の敬虔なる態度、隔意なき款待、盛んなる知識欲に對し、感謝と尊敬との念を禁じ得なかつたのである。

または公平なる觀察者の報告に據つて、アフリカの内部に於て回教が如何なる感化を蒙味なる黒人種の上に及ぼしつゝあるかを見よ。熱心にして單純なる亞刺比亞人の傳道によりて、一度び回教が其根を黒人部落の間に下ろすや否や、多神教は忽ち其影を失ひ、低級なる迷信は次第に衰へ、殘酷なる人身供犠は其跡を絶ち、裸體の風は着衣と改まり、不潔飲酒懶惰の風は清潔禁酒勤勉と改まり、親切と慈善とが普く行はれ、社會的秩序の爲に簡單なる成文律が出来るやうになつた。而して是くの如き一般精神生活の向上に伴ひて、知識的欲求もまた盛んになつて來た。ドイツの記すところに據れば、飢ゑ渴く如く知識を求むる年若き黒人回教徒は、或はボルヌやチャド湖畔から大沙漠を横りて、或はダルフルやワダイからニル河を下りて、科學や哲學や哈蘭の講義を聴くために、千里を超ゆる長途の旅をしてカイロの大回教學院に來り學ぶとの事である。而して彼等は此處で幾年かの勉學の後、再び郷里に歸りて其の修得せる知識を他の回教徒に頒つのである。されば今や多くの黒人は亞刺比亞語譯の舊約の全部又は一部を有し、或者は同じく亞刺比亞語譯のプラトーン及びアリストテレスを讀み、或者は倫敦の書店より書籍を取寄せて種々なる知識の獲得に努め、偶々アフリカ内地を旅行せる白人をして、その意外なる教養に驚倒せしめて居る。黒人に生れて基督教に歸依し、プレスビテリアン派の牧師として、生涯を西部アフリカ

リカの黒人教育に献げたるエドワード・プライデンの如きも、『若しムハマッド教に對して甚がしき不公平なる非難を加ふる基督教徒にして、自分のやうに多年アフリカ内地を往來し、自分が目撃したやうにムハマッド教を奉ずる黒人部落と然らざるものとの間に存する著しき對照を目撃して、一は不斷の淪落到停滯し、他は心身共に潑刺たる進歩を續けつゝあること、一は一定の法律すらなく、他は次第に秩序と安寧とが確立しつゝあること、一は恣なる飲酒に耽溺し、他は嚴格に節酒又は禁酒を守りつゝあることを知つたならば、ムハマッド教の弘布を以てアフリカ内地に罪惡を播くものとする彼等の謬見は、自ら改まるに相違ない』と言つて居る。總て此等の報告は回教が決して一般に基督教徒によりて傳へらるゝが如き宗教に非ざることを吾等に教ゆるものである。

五

さて回教は佛教並に基督教と等しく、教祖の人格を中心とする宗教である。『アルラーの外に神なし、ムハマッドは其の豫言者なり』てふ回教の根本信條が、最も明白に示す如く、單にアルラーを信仰するだけでは未だ回教徒と呼ぶことが出来ぬ。そは獨一の神を信ずると共にムハマッドをも信せねばならぬ。換言すればムハマッドの生命に歸一しつゝ、アルラーを信せねばならぬ。基督教が教へたる父なる神も、モーゼが崇めたるヤーゼーも、ムハマッドが教へたるアルラーも、恐らくは同一の神格に外ならぬかも知れぬ。

吾等は寧ろ爾く信せんとするものである。さり乍ら假令同一神格であるにしても、或は基督に歸一し、或はモーゼに歸一し、或はムハムマッドに歸一して之を崇拜することによつて、夫々基督教徒たり、若くは猶太教徒たり、若くは回教徒たるのである。従つて總ての回教徒は多かれ少なかれムハムマッドの生命を通して活き、ムハムマッドはまた總ての回教徒の生命の衷に生きて居るのである。されば佛敎並に基督敎に於て然るが如く、回敎の核心は敎祖ムハムマッドの生命其者であり、その發達は取も直さずムハムマッドの生命の不斷の發展である。濁れる源から清き流れが逆ることは出来ぬ。吾等が繰返して述べたる如く、總ての回敎徒は決して『惡魔の弟子』を以て呼ばる可きものでないとするれば、回敎の敎祖其人も亦決してメラクトンが信じたる如く惡魔ゴググ又はマゴググの化身である筈がない。

ムハムマッドに先立つこと千餘年又は六百年の昔に世に出でたる佛陀及び基督の生涯は、半ば神秘の雲霧に蔽はれて居る。古への信者の敬虔なる信仰は、彼等の生活を醇化し、其の人格を理想化した。恰も馬琴の描ける八犬士が現實の世界には見出し難き道義其者の權化なるが如く、彼等もまた人間としては餘りに完全なる、餘りに優越せる、餘りに神々しきものとして描き出されて居る。佛陀としてはあらで悉達多としての言行、基督としてはあらで耶蘇としての言行を知ることは、今日の吾等に取りて至難の事業である。然るにムハムマッドに至りては、少くも彼が新しき宗教を宣傳し始めた後の言行は、實に巨細を盡して書き遺され、人間としての生活が極めて赤裸々に描かれて居る。此點に於て佛陀及び基

督が半神話・半歴史的なるに對し、ムハムマッドは純乎として純なる歴史的人物である。固より後代の信者が彼に對する鑽仰の念は、縦まゝなる超自然的事實を以て彼の生涯を潤飾せんとした。例へば彼の父アブダラーの端麗なる容姿を述べては、彼が其妻を迎へた時に、メッカの處女二百人が失戀のために悶死したと云ひ、またムハムマッドの幼時に於て、輝ける衣を着けた二人の人が、彼の胸を割いて臟腑を取出し、清淨なる砂を以て之を洗ひ、黒き色せる罪惡の種子を其の心臟より取去つたと云ひ、またムハムマッドが隊商を率ゐて沙漠を旅行した時に、天使が一團の雲を彼の頭上に翳して烈日の炎威を防いだと云ひ、また彼が始めて不信者と戦ひし時に、天使長ガブリエルが三千の天使を率ゐて彼を援けた爲に、敗軍を轉じて大勝を得たと云ふやうな記事は、回敎徒の手に成れるムハムマッド傳中の隨處に之を見出すことが出来る。さり乍ら吾等は容易に此等の潤飾を除き去りて、在りしが儘のムハムマッドの面目を窺ひ知ることが出来る。

六

吾等は固よりムハムマッドの總ての行爲を辯護して、其の生涯を瑕なき璧たらしめ様とは思はぬ『ムハムマッドの生涯は、神の生涯に非ずして人間の生涯なり』と微妙くもレーン・プールが評せる如く、彼は始より終まで徹底して人間である。彼は女性に對して放縱であつた。天啓に言寄せて養子の妻をさへも自

己の妻妾の中に加へた。彼はまた其の美しき諸妻に對して嫉妬の情を禁じ得ぬこともあつた。彼はまた敵に對して殘忍冷酷であつた。卑しむ可き復讐の念に神聖の名を附したこともあつた。その部下が敵の女酋を捕へ四頭の駱駝に四肢を縛り、之を擱裂したのをも咎めなかつた。冷然とてて七百の捕虜を自己の面前に屠らしめたこともあつた。『戦争は所詮詐術の遊戲のみ』と公言して敵を斃す爲に手段を擇ばぬこともあつた。或は自ら刺客を教唆して卑劣なる暗殺を敢てしたこともあつた。總て此等の事實は何人も彼の爲に辯護し得ざる缺點である。

されど彼は之と同時に吾等をして其前に跪かしむる高貴なるものを有して居た。第一に彼は自らアブラハム、モーゼ、耶穌に次で現はれたる最大の豫言者として、地上に眞宗教を弘布すべき使命を帯ぶることを確信して居た。而して其の使命の爲に幾度か死生の途上を往來した。彼は傳道の爲には危険を甘味とし、艱難を娛樂とした。彼は綿の如き温情を有して居た。彼は喜べる者に遇ふ時は其手を握りて共に喜び、悲しめる者に會ふ時は同情の涙を灑ぎて共に悲しみ、彼を招く者あれば如何なる卑賤の人にも其の厚意に應じ、物を贈る人あれば何物にても喜んで之を受けた。彼は未だ曾て自己の庫を有たなかつた。物心兩界の君主として、亞刺比亞の民に臨むやうに爲つてからも、彼の生活は貧民の生活であつた。彼の寢床は粗き藎であつた。而して彼の信者は彼の背に残る藎の痕を見て涙を流さざるを得なかつた。彼は二日の食糧を家に貯へることなかつた。彼は信者の喜捨を日毎に受けて居たが、若し何等の都合で

之を得なかつた場合は、自ら外套を猶太人の質屋に典して、家族の爲に其日の食を心配した。彼は戦利品の分配を受けたが決して之を私の爲に用ゐる事を爲なかつた。彼の良心は猛烈であつた。その神を畏るゝ情は火の如くであつた。彼は其の死期の迫れるを知るや、一日病を推して會堂に至り、集まれる信者等に向つて、若し汝等のうち故なくして吾が鞭撻を受けしものあらば、吾は吾背を其人に向けて復仇の筈を甘受しやう、若し汝等のうち吾が行爲に回教の名譽を汚すものありしと思はば、公衆の前にて之を弾劾せよ、若し汝等のうち吾がために其の所有を奪はれたるものあらば、吾は直ちに負債の元利を支拂ふ可しと言つた。偶々會衆の中より聲ありて、吾は銀三枚を要求すべき理由ありと言ふや、彼は其人の訴ふる所を訊きて、雷に其の要求を満足せしめたるのみならず、來世の審判の日に訴へられずして此世に於て訴へられたことを感謝した。吾等は之と同様なる逸話を更に多く擧げることが出来る。而して總て此等の言行は何人も其の偉大なる精神の發現なることを拒む事が出来ぬ。

七

蓋しムハムマッドの生涯は眞に波瀾重疊であり、其の性格は眞に複雑を極めて居た。彼は貧しき近親に寄食して育ちたる孤兒であつた。無人の曠野に羊を牧する青年であつた。而して突如として富みて地位ある紳商となつた。平和なる家庭の主人公が自殺を企てるまで激しき宗教的煩悶に陥つた。而して遂に

アルラーの豫言者たる自覺を得て其の信仰を宣傳した。身を置く處もなきほど甚だしき迫害を受けた。而して一朝にして有力なる都市の政治的並に宗教的首長となつた。劍によれる傳道を開始して、兵馬の間に馳驅する將軍となつた。而して十年の間に全亞刺比亞を征服し、更に全世界の克服を遺言して世を逝つた。彼は外より来る種々なる境遇や敵對者と戦つたと同時に、夫れよりも更に激しき内面的苦闘を續けた。彼は自己の衷なる劣情と戦ひ、迷信と戦ひ、誘惑と戦ひ、怯懦と戦ひ、冷酷と戦つた。而して時としては『惡なる彼』が『善なる彼』に打勝つたけれど、これを全局の上より言へば彼の生涯は疑ひも無く偉大なる勝利の生涯であつた。而して彼が比類なき堅信と金剛の意志とを以て内外の敵を克服せる其の慘憺たる努力が、やがて彼を信する總ての人々の生命の衷に、偉大なる力として復活し來れるのである。

初期に於ける回教の眞に驚嘆すべき迅速なる弘布は、世界宗教史上の一偉觀である。而して或者は之を以て武力によれる傳道を敢てした爲であると言ひ、或者は教義の簡明易きが爲であると言ひ、或者はムハムマッドが巧みに高尚なる信仰を竊んで自教を飾れる爲であると言ふ。さり乍ら何事にも優りて回教弘布の原因となり、その特色を形成したものは、教祖ムハムマッドの人格に潜める力、並に彼の強烈なる個性であることを忘れてならぬ。回教の眞の偉大は、決して其の煩鎖なる道德律に存するのではなく、其の單純なる教理に存するのでもない。ムハムマッドに於て最も尊きところのものは、神の意志に背く總

てのものを克服せでは止まぬ強烈なる戰鬪的精神である。回教が宛ら江河を決する勢を以て勝利の歩みを四方に進めたのは、實に此の戰鬪的精神が盛んなりし爲に外ならぬ。

回教の研究は興味と云ふ點からも、また有益と云ふ點からも、人々の心を惹く可きものなるに拘はらず、吾國に於ては殆ど顧みられて居らぬ。若し聊か語を強めて言ふならば、約二百年の昔新井白石が采覽異言の中に『回教は天主教に類した宗旨である』と述べた時より、殆ど一步も研究を進められて居らぬと言ひ得るかも知れぬ。若くは研究されて居ても未だ世に公けに爲れて居らぬ。これ吾等が回教研究を思ひ立ち、外國傳道師の應聲蟲となつて徒らに此の偉大なる宗教を罵倒することなく、自由にして先入主なき日本人の精神を以て回教に就て學ばんとする所以である。

信仰とは何ぞ

筧 克 彦

信仰の本質

信仰の本質は眞面目夫自身である。眞面目とは一時の偶然を云ふのでなく、又一方面の心理作用に限らるゝものでない。不圖生じた事や、一時限り存在して居る事柄は、轉變常なきもので當てにならぬ、